サマリートーク

狩野　陽

もう既にひるどきをかなり過ぎ，活動の資源が尽きてカロリーも無くなって参りまして，その上で情報活動するというのは，大変なコストを要します．このような事態を生物はどう切抜けるかと言いますと，自らの身体を食うという形で生物は生き延びることになります．そうすると，それは情報の活動主体自体が減っていくということになるわけで，もう既にそういう意味での危い時期に達しております．さて，このシンポジウムにまとめをする必要があるかどうかということについては既に学部内の準備段階でかなり論争がございまして，私はまあ，きわめて消極派でしたが，これは田中先生の切実なるご希望で，長大なるまとめの時間をとるようになりました．実際の結果といたしましては，大体の事象が私の思っておりましたような悲観的な形になるもので，事実上まとめるための時間はなくなりました．さらに，これだけ明確な形でさまざまな問題や意味をめぐる議論の膨張・拡大，そし紆余曲折がありながら，提示された論点がきわめて鮮明な感受を生じている状態で，それを直後にまとめて行くということ自体が，心理学で言う記憶に対する一種のいわば干渉事態で，これは記憶と学習を阻害する証拠があります．(笑) そういう意味では良いインプレッションを残すためには殆どこれは黙っておくのがいいかと思われます．それから，もう一つの行き方がありうるとすれば……損なわない程度で，何らかの形で皆さんが記憶を保全される何かのきっかけとなるものを申し上げておく，ということは恐らく許されるのではないかと思います．

そうした立場から私なりのまとめを致したいと思います．第一回のシンポジウムは「社会と情報にわたる主題」という極めて漠然とした主題についてお願いを申したにもかかわらず，大変凝縮した形でご論議をいただき，今ここで論戦に加わった沢山の人たち，また準備や運営に携わってきた者達にとっては，短い準備の期間の中では望外の幸せだったと思います．そういう点では，ご論議いただいた事に対して大変感謝を申し上げております．その時に，お一人お一人のいわばアプローチの仕方は全く異なると言っていいぐらい違うのですけれど，先ほど田中先生がおっしゃったように，情報の定義は百人寄れば三百の定義があるというような事情のなかで案外ここにおいて，皆さんが，共通して情報とは何かを長い蓄積をもとにして問題とされただけではなく，相互のバックグラウンドについての理解のうえで情報についての意味のある討論を持続することになりました．少なくともわれわれが生きて行くわれわれの社会，それは吉田先生に言わせればかなり長大な，いわば人類が発生する以前も含めての長大な期間を含みこんでいるわけでありますが，そのような時期の中における今日の私たちの情報とは何か，ということが共通の主題となったかと思います．

そういう点では，ここでまず最初に福村先生にお話いただいたのは大変幸いだったと思います．それというのは，福村先生からものをつくる実質に根ざす工学的なアプローチでありながら，そこには私たちの学部の人たちが取り上げたのと共通する形で，いわばそこでの情報というものがイベントの差異の検知と，あるいは発見として定義をされるところからお話をいただいたわけで，そういう点では差異を作って行くそのようなあり方，つまり概念というものを差異の体系あるいは記号

の成立という形で取り上げられ，単なる記号の問題を越えて展開されました．それを，極めて巧妙なしかも洒脱な筆致で画像を提示し，仮面の比喩をお話しくださいました．これは私のような心理屋にとっては極めて懐かしい論議でして，私たちが普通，心理学的な概念として成り立つかどうかは別問題といたしても，私たちの言う人格，パーソナリティという言葉は，これは古代エトルリア語のいわば仮面をつけた人物，エトルリア地方というのは古代ギリシャとの影響を受けましたから，そこでの神話劇の役であるハデスの女王のペルセポネの名がなまってペルソナー仮面という言葉になったと，普通は解されています．もう少し微妙な言語学的な伝統があるのですけれども，少なくとも仮面が人格を表示することになったところに，近代的なパーソナリティ概念の出発があったわけです．つまり私たちが心理的な現象あるいは精神医学的な現象の中で出会い，一番最初に私たちが学生あるいは初歩の専門家を訓練するときには，とにかくすでに仮面をつけた治療者自身と患者という相手の現われ，色々な現われ，仮面を付けた現われ，という局面を通して，いかにその世界に入ってそこにあるものをして語らしめるかという問題が，これは単なる心理学だけではなくって，人間を扱う臨床科学，精神医学，あるいは精神療法その他の科学の基本になっているかと思います．その基本は事象の相貌のもつ共通性と差異の問題であり，差異の体系に情報としての記号をみることの指摘があり，さらにメディアの問題に触れられ，その進化につれてそれは軽薄短小になって行った，という形で取り上げられて，活版の成立はロジック，ルールというようなものを私達が重視するあり方となんらかの形で共鳴していると．これはそういうものが原因でルールがどうこうしたという因果関係までは行きかねると思いますが，リニアな世界観からの脱却の方向にいたります．これは自然科学者の発想としては，一種の自分の墓穴を掘る，或は土台を堀り崩すという局面が無い訳ではないかと思いますが，ここでは極めて当然のように，いわばデカルト流の流れというふうなものの中でリニアに理解し，あるいはリニアに認識をし，それ以外の物は落とすという正統の科学的考え方が出てきます．つまり，工学的に言いますとぴょんぴょん跳ねるような自動車というふうな物に対して，いわばセーブをしていって，そして目的に直結したいわば正統からみて非法則的なものを切捨ててできるものをとにかくこしらえ上げていくということ，そういうあり方に対して，かなり厳しい警告をお出しいただいたかと思います．このデカルトの時代におきましては，すでにその当時イタリーの片隅でこれに対して極めて拮抗的な立場を定立した人物がおりました．ある面において怨念をこめて，ジャンバチスタ・ヴィーコがこういうデカルト的なリニアな考え方，世の中という具体的現実的事実的なあるものを切り捨ててそして整序していく考え方に対する反抗の烽火を上げております．それは，こしらえ上げたものが真理だというごく通俗的に知られているヴィーコの考え方の奥に，極めて鋭い，言語，今で言えば情報の分析のあり方に関係する事柄がふくまれていたのではないかと思います．そういう点では，ここで指摘されたデカルトの流れとヴィーコの流れというふうなものが，恐らく，先程の指摘の中に軽やかにのっているのではないかと思います．その中で，情報の加工とか編集とか，そういうモザイク的な物を編集していくあり方があり，それを表示システムやマン・マシン・システム，そして社会的なネットワーク，というふうな形にまで広げて論議していただきました．また，極めて色々な局面でエージェントとして働く物についての重要なご指摘がありました．名古屋の土地柄でしょうか，そこではパチンコが出て来て，結局，キーを押して待っていると

出てくるというお話になりました．そのブラックボックスの前で待っていると出てくるというのは，私達が脳を取り扱ったときの一番の問題でした．自閉症の子供だとか精神薄弱とか精神分裂病を扱ったときに，私達のその当時の知見では脳はブラックボックスで，それをいかにして構造化するかという手掛りはたった一つありました．それは，何か私達が即座にやっているように見える知覚でも，あるいは思い出しでも，そういうものには全部幾許かの時間がかかるという事実でありました．つまり，そこでは何かの仕事が行われていて，仕事の手順がある．それは，何か脳の中に於てそういうふうなからくりが働いていて，からくりというふうな物は時間的ないわば経過をちゃんと持っているんだということ．それが，私達は実験ではたとえば十万分の一とかというフラッシュを使い，それで映像を出すのですが，その十万分の一秒と次の十万分の一秒の刺激の間の，たとえば百分の一秒とか十分の一秒とかあるいはもっと長い時間の間に，人間は何かの形で学習して次の物に対する反応を変えていくと考えました．私達が誘発電位や脳波の電気現象を捉えていくと，何かの形で脳の中にある活動は一定の時間経過を持っている，ブラックボックスではなくて，働くからくりがあって，その仕事の手順という形で固有の時間経過を持っている，そういうふうな事に対して，極めて有力な保証を与えてくれたのが情報処理の考え方だったわけです．そういう点では，これが心理学などに与えたインパクトは，私達が仕事を始めてから後の事でしたので，それはある面において後からやってきた教示であったような感じがいたします．しかし残念なことに，情報処理が教えてくれたものには，実験の構成をきちんと指示する能力はございませんでした．つまり，それはどのようにでも推論が可能な状態でして，そういう意味では，実験にそれが特定化できるのに，恐らく吉田先生が社会学の中で定義されたような，壮大な心理学のセオリーを必要としたと思います．残念なことには，私の見るところでは心理学にはそういう第一級の秀才はこれまで生れて来なかったのではないかと思っています．

エージェントが多くなればなるほど，それに対応するフェーズで，対象を識別同定するような場合いわば識別局面は小さくなり，その抽出した面でレスポンスし，処理することになります．そういう点ではそのあり方の中でいったい対象それ自体は何か，その人本人というのは何か，というふうな問題が残ります．これは類推をいたしますと，そういう点では簡潔に示されたカントの問題かと思います．つまり，物自体としてカントが出したあり方に近いものがやはりここでも顔をだしたのではないかと思います．そのときに，子供のころにカントを読んだときを想い出しました．これの解決の挫折点というのは，ご承知かと思いますが，先験的な総合判断がいかにして可能かについて，カントが，経験一般の可能性の制約は，同時に経験対象の可能性の制約だという，これは経験する活動認識する活動とその対象の両方をつないだだけでこれでは問題の解決にならずさっぱりわけが解るようにはならない．いったい私達が本来，対象を総合的に知ることができるかということについては，このままでは不可知論に近い要請というか，あるいは希望にしか過ぎないことになるのではないかという深刻な印象を受けたことがございます．ですから，問題は，エージェントというようなものの働きで，果たして，福村先生がお話くださったように，対象そのものがどう本来の形でもって現れるのか，仮面の中に本体が見えるというふうな状態がいかに可能か，という問題がやっぱり残ることは当然だろうと思います．こういうふうな推移で田中譲さんが，ここに関わってではありませんけれども，この仮面とエージェントということについて，問題を提供さ

れたのは恐らく当然の成り行きだったかと思います．この場合に，エージェントという言葉について私にはちょっとした経験がございます．あるミーティングをいたしましたときに，あるアメリカの報告者がエージェントという言葉を非常に連発いたしました．私も普通の意味で，エージェント概念に関心がないでもなく，その報告者は神経心理学者でしたから，ケミカルエージェントという形で言うのは当然なわけでしたが，私達の用いるのはまあカルチュラルエージェントというふうな言葉でありましたので，とにかくそれで私も文句を言いまして，あなたはエージェント，エージェントと言うけれど，言えば言うほどエージェントというものが何にでも見えるようになる．一体そのエージェントは語義からすると，ちょっと正体を隠して，そして自分のやり方だけを出すというふうな，些か素性の不明瞭なところがあるので，あまりその言葉を使わないで欲しいと，そういう風にご本人に申しました．すると，私の英語がまずかったと見えまして，その方は豆鉄砲をくった鳩のような顔をして黙ってしまいました．その時，私の側にいた大先生が００７と大きな声で怒鳴りまして．つまり，エージェントの代表は００７だったらしくて，それでエージェントは霧散いたしまして，別な言葉でちゃんと事態を一つ一つ話をしてくれるというふうにその方はしてくれました．こういう形で，今日の話の中には，随分いろいろの形で，言葉の中に共通化しにくい一つのギャップというふうなものがあり，それがお互いにしかと見えるようになったかと思います．

しかし，次の吉田先生の場合は，極めて壮大な自然言語とのギャップという問題とぶつかりながら，遺伝情報から始まる情報概念の緻密な統一的な知的体系を建てていただいたことになりました．このＤＮＡに大いなる衝撃を受けたのは恐らく自然科学者よりも遙かに，社会科学あるいは人文科学者が多かったとさえ言えるかと思いますが，こうしてＤＮＡの中における遺伝情報の立て方について，かなりの程度で注意深く扱いながら，やはりそれは情報だ，それが一貫して人間の，私達の普通の意味でいう情報とも関わる局面をそれは含んでいるのだという展開で，システム，知的なシステムを構成された吉田先生は，日本人としては珍しく執着力の強い，論理構築をされた研究者であられたと思います．そういう意味では，こういう方は一生涯そういうことを考えて，死ぬるときになって誤解であることが解ることがある．

（一同）（笑）

吉田：そうなんですよ．（笑）

狩野：そういう意味では，現在のところ生きていらっしゃるので祝福にたえないという気持がいたします．

（一同）　（笑）

狩野：そういう中で，敢えて情報を取扱う通例であるシャノン流の定量的な定義ではなくて，定性的な定義に関わられたという所に，ある面における吉田先生の社会学の一つの基本的な姿勢が出てまいるかと思います．その時に，ヒューレ＝質料に対応して形相というふうに問題をお取り上げになりました．このあたりは伝統的概念との照応を，それに馴染んできた者への包括，いわば配慮として付言された意味もあろうかと思いますが，おそらくかえって誤解を招くこともありうるでしょう．むしろ，こういうふうな形で諸学を統一される場合には，この辺あたりはかえって切り捨てて，そしてご自身に忠実な言葉によられた方が誤解が生じなくて，情報の持つ意味が生きるのではないかと思われます．知るものをして，形相がアリストテレスの形相という形でつながるな，しかし違うな，ということを理解せしめるのが恐らく説としては一貫するのではないかと思いました．というのは，形相の場合に如何にして自己組織性というものにつながるか，ということに関しては，恐

らくそういう意味での発想のあり方がちょっと異質なのではないかという心配が私にはあります．これに対し，パターンというものはランダムと対応していますが，パターンは語義からみれば，パトロンに繋がり，これはパーテルがもとでございますから，父親という意味を語感として持っているだろうと思います．そうしますと，何か作り上げていく何かというあり方では，恐らく形相よりもはるかに素朴で吉田先生の学問の内容とは密接しうるだろうと思います．そういう点ではこのパターンについて，私はまず，非常に初歩的な形では，情報というふうな形になる時に，パターンをパターンとさせて行く内部構造の組織的なあり方の契機になっている一つ一つを結びつけるものが恐らく情報であるということは，これは十分に理解できます．パターンそのものが情報であるというのは，そのパターンが如何に使われるかという使いでの関係においてのお話の場合には，これは極めて常識的で分かりやすい．しかし，このパターンの持っている自己組織性をそのままその情報という形で捉えていくのには，まだまだ今日の論議だけでは十分に理解し難く，それをどのような方法で解明してゆくかがわからない局面があるかと思います．しかし，それがいわば色々の情報のレベル，あるいは色々の認識とか指令とか評価とか，そういうふうなものの中で如何に概念として耐えていくか，そして，それが一貫した情報という形でもって定義された時に持つ理論的な効率というものに関しましては，十分説得的にお話をいただいたと思います。しかし，それは，恐らくここにいる社会学者の二人の方々がかなり執拗に問題提起したところでありまして，そこの論議はここしばらくは，白熱的な形でもって続いて，しかも，いくらこの時間を長くいたしましてもけりはつかないのではないかと，（笑）そういうふうに思っています．

そういう点から申しますと，田中先生の場合は本質的にそのもの，物事そのものの構造を明らかにすることに主体的に単刀直入に切り込まれ，そういう意味ではややドンキホーテ的でございまして(笑)，そういう形において情報そのものというふうなものを端的に明らかにする，つまり，それを担う本体そのものを明らかにする試みをなさいました．しかも，それを取り扱う個別科学が社会情報学として如何に可能かというふうな問題に関しましては，田中先生ご自身はこのことについてまだ極めて納得のいかない消極的な理解をお持ちなんですけれど，本質的に吉田先生の文系の悩みを越えておりまして，そういう点からいきますと，個別科学としての情報科学の可能性というふうなものに関しましては，勇敢な「田中楽天主義」というものは極めて生産的な意味を持つのではないかと，少なくともそういう意味においてそういう御人がこの学部にいることが，大変生産的ではないかと，ひいては日本に，こういう人がいることも，大変楽しいことであると思います．まあ，楽しいというのは，本人が幸せであるかどうかとは別な問題で（笑）すが，そういう意味に於いては，それが現時点では最後にまとめという形では未だならず，漸く出発点についた論議のままではございましたけれども，一応皆さんがおっしゃることがやがて進展して将来において田中先生の論議の中に帰属して行くという方向においては，大変良い報告者になられたのではないかと思います．

私がちょっとメモしてきた話に全然触れないで，今前置きだけを申し上げたわけでございますけれど(笑)，そういう点では決して御三人の方のおっしゃることがこちらの中において全て腑に落ちるというわけではございませんが，たいへん愉しい談論の時間を過ごしました．このお話を通じて皆様の中にお聞きになられたことが記憶干渉を起こさず既得の内的意味連関，概念システムとの調整のもとでより深く書き込まれることを願いまして，

私のまとめをこの辺で中断いたしたいと思います．これは完結ではなく，そういう意味では，この会合では情報交換が可能であったこと，しかもそれが情報交換の営為，営みというものの積み重ねが，ここにおける社会情報を取り扱う者の責務であることは確かでありましょう．この場においてこういうふうな極めて曖昧な問題に関しまして，個別科学としてのこういう問題がいかに可能であり，如何なる筋道を取って，まあ，これは福村先生の願いで言えば，単なるリニアな形ではない展開というものを，いつそれが可能であるかを，あちこち難しい問題ですが，そういう意味で社会情報学の形成に向けて一つの遠い道程のひとつの営みを進めた，という段階は得たのではないかと思います．長い間，皆様ご苦労さまでした．どうも有難うございました．

（一同）（拍手）

（司会者） 司会の方の不手際もございまして大変時間を超過いたしましたけれども，これを持ちまして，社会情報学部創立記念第一回シンポジウムを終わりにさせていただきたいと思います．皆さんどうもありがとうございました．

（一同）（拍手）